独座観念

主客とも餘情残心を催し、退出の挨拶終れば、客も、露地を出るに高声に咄さず、静にあと見かへり出行ば、亭主は猶更のこと、客の見へざるまでも見送る也。籾（さて）、中潜り・猿戸、その外、戸障子など、早々〆立などいたすは、不興千万、一日の饗応も無になる事なれば、決て、客の帰路見えずとも、取かた付、急ぐべからず。いかにも心静に茶席に立もどり、此時、にじり上りより這入、炉前に独座して、今暫く御咄も有べきに、もはや何方まで可被参哉（まいらるべきや）、今日、一期一会済て、ふたゝびかへらざる事を観念し、或は独服をもいたす事、是、一会極意の習なり。此時、寂莫として、打語ふものとては、釜一口のみにして、外に物なし。誠に自得せざればいたりがたき境界なり。

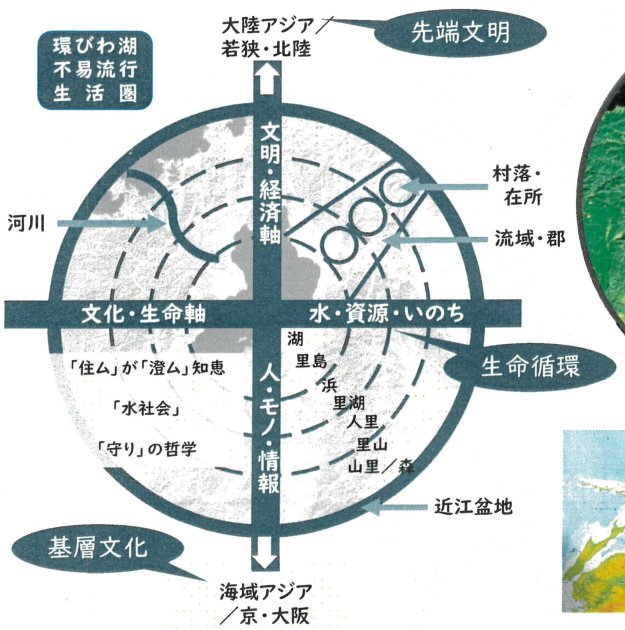
『茶湯一会集』　井伊直弼

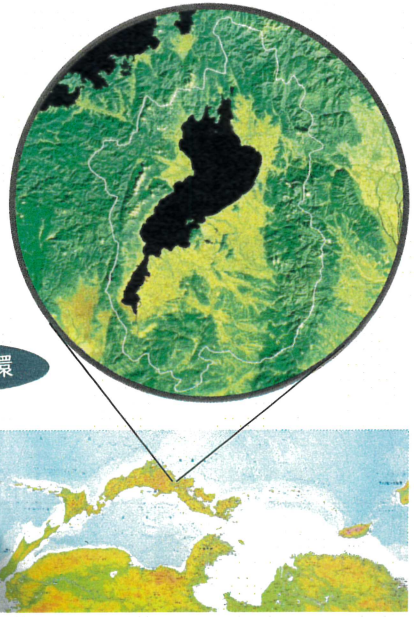
（現代語訳）

茶席が終わり、主客ともに名残惜しく別れの挨拶を済ませ、客が露地にでたならば、もう声高に話さず、亭主は客が見えなくなるまで静かに見送るものである。すぐ中潜り、猿戸、その外戸障子などを閉めてしまうのはよくない。今日の饗応が台無しになってしまう。客が帰って行く姿が見えなくなっても、片づけを急いではならない。心静かに茶席に戻り、炉の前に独り座って、「もうちょっと話がしたかったな、今頃はどの辺まで帰られただろう」などと思いながら、今日の一期一会はもう二度と再び巡り来ぬことを観念する。独りでお茶を点てて、服してもよい。これこそ一会の極意である。この時、打語らうもの、釜一口のみ。これは辿り着くのが実に難しい茶の湯の境地である。

引用：（本文）林屋晴三郎ほか編注『日本の茶書2』より井伊直弼「茶の湯一会集」１９７２年、平凡社
（現代語訳）きとなお（佐藤喬之）「note　独座観念」2019年1月10日 09:23投稿、https://note.com/satonao310/n/n175d562c127

文化・生態から見た近江の構造



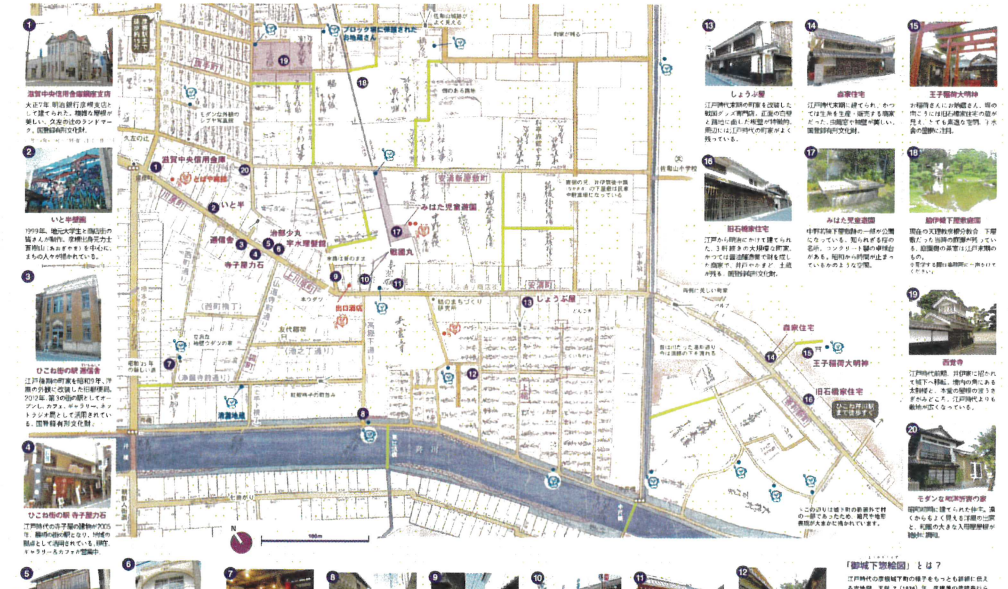


2020年度チラシ

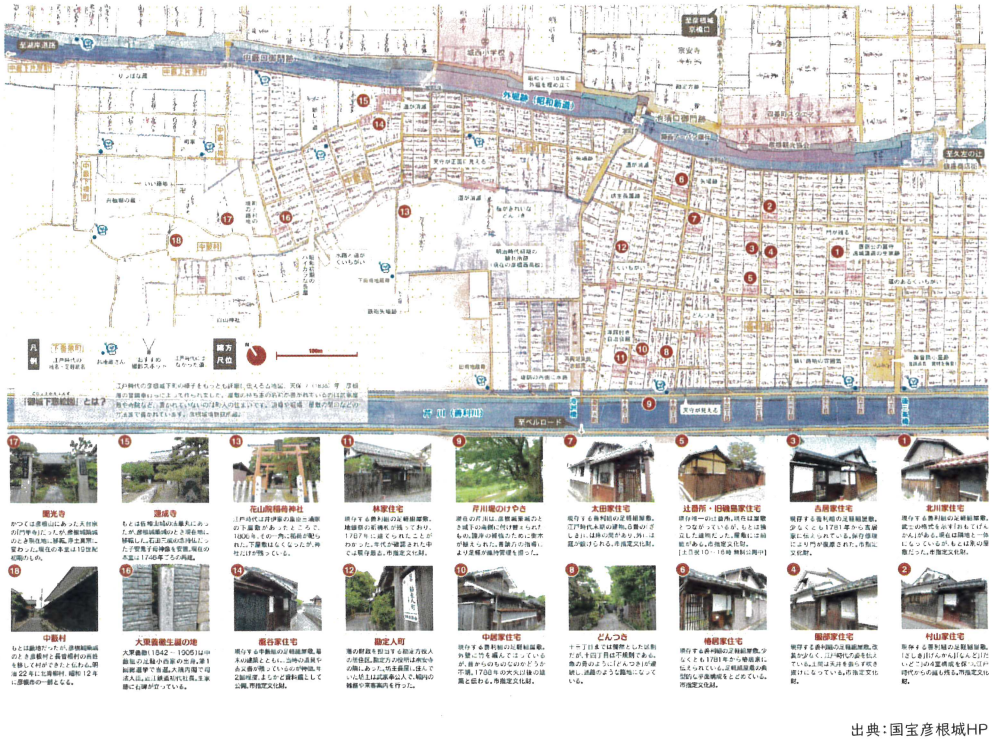
世界遺産のまちづくり・人づくり
ー彦根商工会議所寄附講義ー

- 彦根市とその市民は彦根城（およびその関連遺産）の世界遺産登録に向けた取組を推進している。
- 市民としての誇りと自覚を源泉とし、文化および自然の遺産の普遍的な価値に対する認識とそれら遺産の保存および保護に関する意思や理念を世界と共有しながら、あるいはまちの魅力向上への期待等をもって、産官学民相携えた取組への機運が高まりつつある。
- 文化や歴史に留まらず、人とその営みにまつわる様々なものや出来事が複合的に関わり合って成立する世界遺産は、ひろくまちづくりや人づくり、文化・観光政策のマネージメントを学び考えるうえで格好の教材である。大学の立地地元である彦根市において、まさに今、世界遺産への登録に向けた取組が推進されている状況を奇貨として、歴史や文化に関する深い知識とそれらをマネージメントする職能をもってまちづくりに活躍する人材を育成することを期して、「世界遺産のまちづくり・人づくり」を開講する。

市内小学校での交流授業



出典：国宝彦根城HP


「彦根下屋敷図」とは？
東海道
中山道
外堀（現在の内濠）
京橋口
宗安寺
彦根城
京橋口
芹川
芹川堤
芹川
芹川橋
芹川の堤
芹川の堤
芹川の堤